

日本的登山と クライミングの差について

坂下直枝



フィッツロイ頂上近くからのセロトーレ山群 (パタゴニア)



1997 年 (平成 9 年)
8 月号 (No.627)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

日本的登山とクライミングの差について……………	1
ダウラギリ I 峰登山隊 1997……………	4
報告	
科学委・夏山気象入門第 2 回……………	5
科学委・火山探索・磐梯山……………	5
二火会・函南原生林を歩く……………	7
・富士山麓の樹海に学ぶ……………	7
丹水会・藤野芸術の家……………	8
92 同期会・三頭山……………	8
海外の山・ヒマラヤ登山新世代……………	6
JAC・ORIGINAL GOODS Guide……………	9
支部だより	
信濃支部・第 51 回ウエスタン祭 10……………	10
北海道支部・岩登り同好会……………	10
宮城支部・寒風山山行……………	11
岐阜支部・台湾の能高山登頂……………	11
宮崎支部・ササユリ山行……………	12
新入会員……………	13
東西南北	
絲綢之路の未踏峰……………	14
白神問題と組織運営について……………	15
2 年半ぶりのネパール……………	16
日高信六郎さんとの旅……………	16
忘れられていたピッケル……………	17
図書紹介・書籍受入報告……………	18
会務報告・ルーム日誌……………	20
INFORMATION……………	22

▶ 日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木・土曜日	10~20時
水・金曜日	13~20時
▶ 図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日	13~20時

■ AAC 総会でのスピーチ依頼

七月の初旬、K2 北稜などにも登っているシアトルのベテランクライマー、ステイプ・スワンソン氏から突然電話があり、十二月にシアトルで開かれるアメリカン・アルパイン・クラブ (AAC) の年次総会で日本のクライミングの現状についてスピーチしてもらいたい、という。「なぜ日本人の登山方法やスタイルは、欧米のそれとは明らかに違っているのか」がテーマである。日本のみならずアメリカのクライミング事情にも詳しく、かつ英語を話せる日本人クライマーということで、アレックス・ロウが推薦したのだという。AAC の年次総会は、ボストン、サンフランシスコ、ボウルダーといったクライマーの多い都市で持ち回りで開催され、今年はシアトルで行

われるらしい。地元の会員が中心となって準備するので、ステイプにその役割が回ってきたようだ。

十年以上前のことだが、私はオーランドで行われた総会にイヴォン・シュイナードさんに誘われて出席したことがあったが、そのときのゲスト・スピーカーはワルテル・ボナッティさんだった。聴衆一同、彼のアルプスやヒマラヤでの英雄物語を期待していたのだが、その夜はどうしたわけか、ボナッティさんは、K2 の遠征で自分がいかに不当な扱いを受けたかという愚痴を、延々と四時間にもわたって話し続けたものだから、途中席を立つ者が続出して、十一時の終了時には、私を含めてわずか五人しか残っていなかった。

そんな苦い経験を思い出しながら、総会で話すことは光栄の至りだが、聴衆を英語で楽しませるほどの話術

や語学力を持っているわけではないし「なぜ日本の登山隊は欧米とは違うスタイルで登るのか」といった内容は、私にとってはかなり憂鬱な仕事だ。一週間後に返事します、と電話を切った後「どうして日本の登山スタイルは違っているのだろう。そしていつ頃から違ってきたのだろう」と改めて考えた。

■フリークライミング分野は欧米と一致

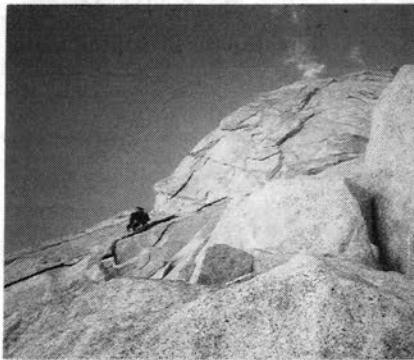
クライミングといっても、フリークライミングの分野では、六〇年代、七〇年代こそ日本と欧米との間に大きなギャップがあったが、八〇年代を通じて多くの若いクライマーたちの努力によって、そのギャップはほぼ埋められたと思う。技術レベルや層の厚さはともかく、現在日本のクライミングスタイルや基準は欧米のものと完全に一致している。

一〜二年クライミングの経験を積み、通常、アメリカングレード5・12Cほどのかなりの難しさなのかとか、フレンチグレードの8C+は世界で何人ぐらい登っているのかは、分かるようになるし、レッドポイント、オンサイトといった言葉は国際的共通の用語で、日本のクライミングスタイルをも規定しているといえる。

ヨセミテのエルキャピタンなど大岩壁で行われる人工登攀もA1から5までその難しさや危険度によってグレード化されているが、その体系は国際的に認知され、日本のビッグウォールクライマーも当然のこととして理解している。アイスクライミングも同様のグレード体系があり、近年国際的に認知されつつある。アルプスの各ルートは無論のこと、古くからグレード化されている。そう考えると、ステイプのいう「異質な日本の登山スタイル」とは、彼が電話で話していたようにヒマラヤやアラスカで行っている日本隊の行動を特定しているようだ。

■八〇年代はアルパインスタイル登山が主流

登山スタイルを考えると、山学



フィッツロイの登攀 (パートナー・渋谷英明)

同志会に入会して二年目の八木君をつれて穂高に行った、十三年前の正月の出来事を思い出す。

私たちの計画は、屏風―前穂東壁―瀧谷―湖沢岳西尾根を八日間の予定で登るものだった。屏風の頭から八峰に向かう途中、大きなキスリングを担いだ登山者が三、四人、慶応尾根から登ってくるのが見えた。明治大学の人たちだった。六峰、四峰三峰にはいていねいに固定ロープが張ってあった。私たちが八峰で一休みしたとき、彼らはトランシーバーで交信中で、「ベース、ベース」といった呼びかけの声や「明日、三峰のパーティーが頂上アタックです」といった会話が聞こえてきた。

二十歳になったばかりの八木君は不思議そうに「あの人たちは何をしているんですか」と聞く。「前穂をヒマラヤに見立ててトレーニングしているのさ。ちょっと、時代がかわっているけど」と答えると、さらに鋭い質問。「あんなことやって面白いですか」「さあ、どうだか。でもやっている本人は結構面白いと思っているかもしれないね。俺もヒマラヤでは、あんな風にやってきたからなあ」「そうですか」と合点がゆかぬ顔つきだった。

その頃は私自身、八二年のK2北稜の遠征を契機に、七三年のアンナ

ブルナII峰以来十年にわたって続けてきた大人数、固定ロープ、シェルパつき、といったヒマラヤだけに適用される登山スタイル(ポーターメソッドとか包囲法とか呼ぶようだが、ここでは便宜上遠征登山と呼ぶことにする)に見切りをつけ、日本の山やアルプスの岩壁を登るような普通のスタイルでヒマラヤを登るべく、その春には、アメリカのジョン・ロスケリーとジム・ブリッドウエルと三人でタウチエ東壁、その後、単独でアマダブラム西壁の初登を計画していたので、八木君の素直な疑問が実に印象的だったのだ。

七五年のメスナー、ハーベラー・パーティーのアルパインスタイルによるヒドンピークの成功は、瞬く間にそのスタイルをヨーロッパのクライマーの間に広め、その後のヒマラヤ登山の方向性を決定づけることになった。七〇年代、アンナブル南壁やエベレスト南西壁をはじめとする遠征登山の代表的登山家だったクリス・ボニントンでさえ、八〇年代は、すべてアルパインスタイルの登山に転向している。

■日本だけ遠征登山が続く要因は

ではなぜ、日本だけが遠征登山からアルパインスタイルへの転換がうまくなされなかったのだろうか。そ

れは多分、次のような要因が複合的に絡み合ったからだと思う。

(一) 中高年登山とか百名山登山という言葉に見られるように、欧米ではハイキングやヒル・ウォーキングと呼ばれる範疇の山歩きも、日本では登山という言葉で包括的に呼ばれるので、マウンテン・クライミングとハイキングの区別がはっきりしない。

(二) 富士登山に見られるように、日本の山はクライミングの経験のない人でも、老若男女を問わず歩けさえすれば誰でも、どの山にも登ることができる。登山とは歩くことと思っている。

ヨーロッパアルプスでは、マッターホルンに代表されるように一番容易なヘルンリ稜といえども、クライミングの経験なしに登ろうとするのは無謀だろうから、登山といえはクライミングを必ず含むものと考えている。

(三) アルプスやアラスカで経験を積んだクライマーたちが、次のステップとしてヒマラヤに出かける欧米では信じられないことだが、前記(一)、(二)が原因で、日本はクライミングの経験のない、いわゆるハイカーに属する登山者がいきなりヒマラヤのピークを目指す。

(四) 若いときはクライミングをやっていたが、現在はもうクライミング

を止めている人たちの間にも、ヒマラヤは氣勢で出かけ、難しいところは若い隊員やシェルパに任せればいいし、フィックスロープが張られるし、荷物はシェルパが持ってくれるから、日本の山よりよほど楽だし簡単だから、という理由で出かけている人もいる。

(五) (三)、(四)に属する人がヒマラヤ登山を計画し、隊長やリーダーとして隊を仕切るので、現在クライミングをしている若い人が参加しても、これら先輩やリーダー諸氏の教育指導が行き届いているので、これこそがヒマラヤ登山だと信じてしまう。

(六) ジャーナリズムが登山に対して的確な評価ができない。エベレストや八千メートル峰を登れば、どんな陳腐なルートだろうが、三十人の団体が登ろうが、ガイドつきであろうが、自分が吸う酸素ボンベを背負ってもらい、ラッセルをやってもらうためにシェルパを同行させようが、内容がまわらず「登頂に成功」と報ずる。これは何も「朝日新聞」や「読売新聞」だけではなく、「山と溪谷」や「岳人」も同様である。

■勇気と集中力で

あえて山に向かってこそ

前に述べたように、遠征登山が日本にいつまでもはびこっているのは、

上記の要因が複合したものではあるのだが、有り体に言えば、現在日本から出かけるヒマラヤ登山者の多くは、その登山歴を見れば分かるように、他の山域、アルプス、アンデス、アラスカ、パタゴニアの岩壁や氷壁などに登った経験がないので、アルパインスタイルの登山は、初めから無理なのだ。それがステイプのよいうな欧米のクライマーの目には、いわば素人が徒党を組み、シェルパの助けを借りて登っている登山と写るのだ。

山の大きさに恐怖を覚え、ルートの難しさや危険に不安を抱きながらも、登山者の勇気と集中力によってそれらを克服し、あえて山に向かっていくことに、登山の本質と楽しみがあるのだと思う。恐れに打ち勝つため数を頼み、危険を避けるために固定ロープを張るといふ発想は、真の登山とはいえないし、自分が向かう山に対してもフェアとはいえないだろう。最近の銀行、証券会社、航空会社などの日本経済界の不祥事が、国内だけの規制業種の中で起こったことを見ても、国際的な基準のもとで山に対してフェアなクライミングをしなければ、日本の登山は、いつまでも欧米のマウンテン・クライミングとは異質の行為として蔑視され続けるに違いない。

こんな風に書くと、日本のヒマラヤ登山はお先真っ暗なようだが、明るい材料もある。ここ数年、ソロクライミングで活躍中の山野井泰史さん、チョーオユーで登山史上最強の女性ベアといえるクライミングをした長尾妙子さんと遠藤由加さん、ブロードピーク縦走とK2ソロに成功した戸高雅史さん、ウルタルを初登した松岡清司さんなど今後に期待できる力強いクライマーが日本にも増えつつある。

今年は無理としても、数年後のAACの年次総会で、アメリカ人がアツと驚くような日本人による登山を是非発表して欲しいと思う。

カトマンズ
直行便

JAZで行く 国内線 割引有

¥295,000~ ¥418,000

ジャパンエアーチャーター

ネパール・ヒマラヤ・トレッキング9日間 全6コース

①11/7(関空) ②11/14(関空) ③12/26(成田)

運輸大臣登録一般旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

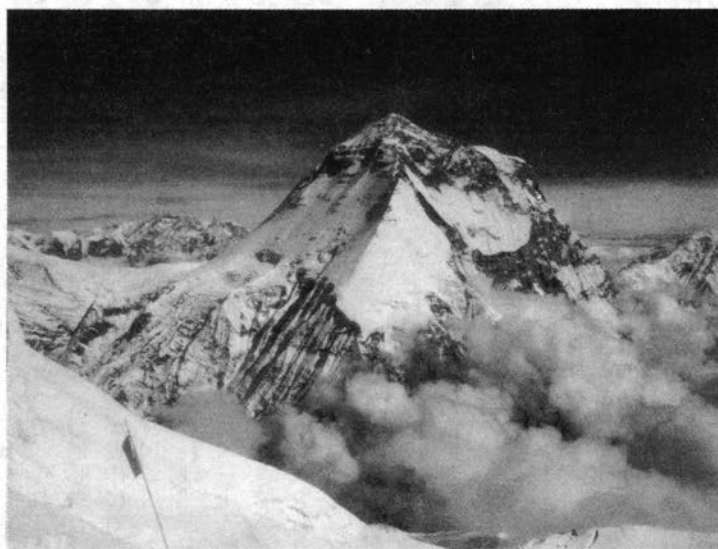
アルパインサービス株式会社

本社/〒105 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

日本山岳会青年部 ダウラギリ I 峰登山隊 1997

——シェルパレス 無酸素の試み——

松原尚之

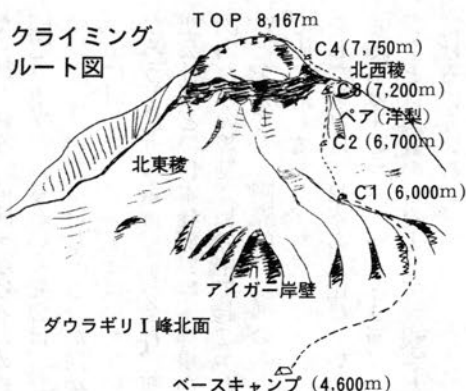


ダウラギリ I 峰 (8167m) 北西面 (撮影・大蔵喜福)

昨年、私たち日本山岳会青年部では、世界第二位の高峰K2（八六一メートル）に平均年齢二十六歳という若い隊を送り、南南東リブ・ルートより十二名の登頂者を出すことに成功しました。「世界最難の山」とうたわれたK2で、事故も怪我もなしに、かつてない多数の登頂者を出し得たことは、私たちがこれまで培ってきた登山の結晶であり、一つの大きな成果だったと認識しています。

しかし一方で世界の登山界に目を転ずるとき、そのレベルは私たちがまだ足元にも及ばぬほど、遙か先を行っております。私たちは登山という果てしない世界において、まだ歩き出したばかりの初級者にすぎないのです。自分たちの力を謙虚に見つめ直し、一歩ずつではあっても、遥かなる高みへと近づく努力を継続してゆかなければなりません。

今回のダウラギリ登山は、バリエーションルートから、酸素と高所



世界第七位の高峰ダウラギリI峰は一九六〇年春、スイス隊(M・アイゼリン隊長)のK・ディームベルガーらが北東稜から初登頂。また、北壁ベア(洋梨)ルートは一九八二年、日本のカモシカ同人隊が初登頂に成功。第二登はまだ果たされていない。

ーターを使わずに頂上を目指す計画です。自分たちが若く未熟な隊であることを認識しつつ、なお自身の枠を破り、より一歩新しいことへ挑戦することが、私たちのこれから山には必要なことと考えます。

今は一生に一度の思い出としてヒマラヤへ行く時代ではありません。意欲ある者は自らその環境を創り出し、続登することではじめてレベルの高い登山者として成長してゆけるのではないのでしょうか。参加メンバーがこの難しい登山に全力で取り組む中で、将来の登山への何らかの糧

を得られることを期待しています。若者ばかりの隊ゆえ至らない点も多々あるかと存じますが、ご指導、ご声援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

計画概要

一、登山隊名

日本山岳会青年部ダウラギリI峰登山隊一九九七

二、目的

ダウラギリI峰(八一九七メートル)北壁「梨」ルートからの無酸素登頂

三、隊の構成(八名)

隊長・松原尚之(32)
副隊長・棚橋 靖(34)

隊員・松本伸夫(32) 奥田仁一(30)
椎名厚史(27) 川高 雄(23)

板谷耕介(22)

BCマネージャー・松本 恵(32)

四、日程 一九九七年

八月二十一日 日本出発、カトマンズ入り

八月二十六日 ポカラへ移動

八月二十八日 キャラバン、順応

活動開始

九月五日 ベースキャンプ到着

(四六〇〇メートル)

九月七日 登山開始

登山活動約四十五日間
十月末日 帰国予定

報告

REPORT
8月

科学委員会・連続講座

「夏山気象入門」第二回 山の気象と天気図の見方

日本気象協会・奥山 蔵

一、気圧配置による天気の違い

山の天気は基本的には気圧配置による天気パターンに、山そのものの地形効果がプラスされる。すなわち(山の天気=気圧配置による天気+地形効果)である。

具体的には低気圧が日本海側にあるか太平洋側にあるか、高気圧の中心が山のどちら側にあるかによって吹く風や気温、水蒸気量が違ってくる。また山の位置が日本海側か太平洋側か内陸にあるかによっても、天気の影響は異なる。

さらに、分かりやすく冬型を例にとっているなら、日本海側の山は冷たく湿った北西風が直接ぶつかるの

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

で雪だが、内陸、太平洋側へと進むにつれて、途中で水蒸気を減少させるので、天気は次第によくなくなってゆく。富士山や箱根では、気圧の谷や前線の通過が重ならない限り、雪は降りにくい。

二、悪天の前兆

①南岸低気圧接近

まず巻雲が現れ、続いて薄い膜状の巻層雲、さらに厚みをまして高層雲、そして乱層雲となって雨が降り出す。上層雲が現れるのは天気が崩れる半日から一日前。また風上の山に笠雲がかかるのも悪天の前兆。

②寒冷前線接近

雲が巻雲から巻層雲に変化した後、急に積雲が発達し出す。自分のいる山より風上の北西方の山が雲に包まれてきたら、間の谷は晴れていても谷を飛び越して、こちらの山のほうが急にガスが吹き上がり、雲が多くなってくる。そしてにわか雨や場合

によっては雷が鳴り出す。

③雷

朝、異常に空気が澄んでいるとき(上層寒気)や、逆に空気が濁って湿気が多い感じ(下層暖気)は、いずれも要注意。

雷三日の諺通り、前日の午後雷があったと小屋の人が言っていたら、今日も、あるいは明日も午後は雷があると考えたほうがよい(夏は上層寒気の動きが遅いから)。とくに上層冷渦といって、寒気の塊が南下してくるときは、その寒気の南東側では強い雷が起りやすい。

④台風

秋台風は本州南海上を北上後、北東進し加速するコースを取ることが多いが、夏は進行方向がよく変わり、動きも遅い(迷走型)。台風が接近するときは、南海上に現れる台風外側の層状の雲の動きに注意すること。また山での風向きの変化にも注目すること。北よりの風が南、南西と変わったら、台風は自分のいる山の西側を通過して日本海へ向かう。また北東風が変わるようなら、自分のいる山の南側、本州南海上を北東進しそ

三、低気圧と台風の構造の違い

低気圧は極方面からの上層寒気の南下(下降流)と、本州南海上方面からの下層暖気の北上(上昇流)と

が結び付いたところで発達が起こる。低気圧上空の風は北西側に寒気、南東側に暖気がある構造が普通なので、そのときは上層ほど風が強くなる。また低気圧中心部の風は、台風ほどの暴風とはならないが、強風(Vin day)域の範囲は台風より大きい。

台風の場合は、日本のはるか南海上の海面水温の高い海域で発生する。海面水温が二六〜二七度以上あるときは積乱雲群が発達し、その積乱雲群を通して下層の暖気が上層に運ばれ、上層では温められた空気が強い上層発散を起こす。この強い上層発散が、下層に強い収束と回転を生じさせて台風を発達させる。台風の発達につれ、中心付近は猛烈な暴風となる。しかし暴風雨範囲は割合狭いので、台風の動きが順調なら、暴風雨の時間もそれほど長くはない。

また台風上空の風は、地表摩擦層上部に当たる一〇〇メートル付近が最も強く、それより上はかえって弱くなっている。

科学委員会・火山探案

猫魔ヶ岳・磐梯山

梅雨入り直後で天候が一番心配されたが、日頃行いの善い人が多かったとみえ、二日とも快晴。木や花も

それは美しく、最高の山行となった。六月十四日、南浦和駅前からマイクロボスで出発、裏磐梯の八方台へ向かう。

一日目の目的地は猫魔ヶ岳から雄国沼。この山の噴火の歴史は古く、それによってできたのが雄国沼である。木々の緑が鮮やかで、春蟬の声に包まれたこの季節の山は本当に好ましい。

山頂で、あたりの山々と沢山の湖沼の眺めを楽しんだ後、雄国沼へ下りる。水辺のレンゲツツジの朱色がまた素晴らしい。遅い出発にしては順調に下山し、沼尻高原の田部井淳子さんのロッジに到着。環境、温泉建物とも最高。

十八時からいよいよ「火山活動史」の勉強会が始まる。十年間猪苗代高校に在職、この春福島南高校に移られたばかりのお若い千葉茂樹先生の話である。地質のご専門で、熱心に火山を調査研究されている。スライドやビデオを使ったスピーディーなお話は面白く、大部分の人は居眠りする暇もなかった。

火口壁や工事による切り割りで見えた地層の説明があった。火口壁ではここが阿蘇山の噴火のもの、ここが大山のものなどということだが、皆何万年も前のものである。それに比べ、たった百九十年前の磐梯山の爆発

海外の山

ヒマラヤ新世代

江本嘉伸

ネパールのブレ・モンズーンが終わると、ヒマラヤ登山の舞台はカラムに移る。

はじめは、悲報が続いた。六月十六日、ブロードピークで静岡市山岳連盟隊の三人が雪崩に襲われ、日米の二隊員が死亡した。六月二十六日にも、昨年七月、未踏のウルタルⅡ峰に初登頂した松岡清司が、レディース・フィンガーで雪崩で死んだ。が、これ以降、快報に転じる。

七月十六日午後一時三十分、小西浩文(三五)と北村俊之(三四)の二人は、ガッシャブルムの頂上に立った。七日、五一〇メートル地点にベースキャンプを設営してから登頂までわずか九日間という速攻だった。

二人は、五月三十一日にはダウラギリ峰に登っている。小西はこれで八二年のシシャパンマを手始めに、八〇〇メートル峰六座にいずれも無酸素登頂した。八月末には、運動生理学の立場から高所登山を研究し

ている山本正嘉とともに「七峰目」のマナスルを目指す。

同じ七月十六日、群馬岳連隊(名塚秀二隊長)は、ブロードピークに登頂、小西たちの登ったガッシャブルム(七日に登頂)、同Ⅱ峰(八日登頂)とあわせ、カラムの八〇〇メートル峰三座の「ハットトリック」登山を成功させた。

群馬隊は、二十人の隊員が三つのパーティーに分かれて二座ずつ登る「ダブル・ハットトリック」を宣言してのカラム入りだったが、こちらのほうは一パーティーがガッシャブルムⅠ峰を登れず、「計五座」とどまった。

K2を西稜から西壁への新ルートから目指した日本山岳会東海支部隊も、七月十九、二十八日、二次に分けて田辺治隊長以下七人が登頂するという特筆ものの成果を上げた。隊長と決まっていた徳島和男(五一)が五月の連休に穂高で雪崩で遭難、登攀隊長の田辺がその遺志を継いでの攻撃だった。

カラムのシーズンが終わると、ヒマラヤニストたちは再びネパールに戻ってゆく。

そのトレーニングというか、前哨戦として、北米大陸最高峰のマッキンリーで戸高雅史(三五)と棚橋靖

(三四)が敢行した「反復登攀」は、注目すべき試みだった。

六月下旬日本を別々に出発した二人は、二十四日に四三〇〇メートルのベースキャンプで合流した。翌二十五日、まず通常ルートのウエスト・バットレスから登頂した。往復の所要時間は、戸高が九時間、棚橋は十一時間半だった。

二日間休養を取ったあと、二十八日、こんどはメスナー・クロウワーを目指す。雪が深くラッセルに苦労した。六〇〇メートル地点を抜けたところで登攀を終了し、頂上へは行かなかった。登りに七時間、下降に二時間を要した。

戸高はここで帰国し、残った棚橋は一日おいた三十日、単独で岩稜ルートのウエスト・リブに挑戦し、往復九時間半で登り切った。一週間に三回もマッキンリーに登ったのである。「富士山頂速攻トレーニングの成果かも」と、本人は言う。

戸高は、チョモランマ北壁のソロを目指して今はチベットにいる。棚橋は、日本山岳会青年部のダウラギリ峰登山隊の副隊長として、八月末、日本を発つ。

低迷気味だった日本のヒマラヤ登山に新しい、強い世代が生まれていくのを感じる。

は、規模こそそれらよりずっと小さく、爆発というより水蒸気による地滑りともいえるということだが、死者四百七十七人、いくつかの村を呑み込んだという生々しい出来事は、地元の人ならずとも忘れられない。

第二日は磐梯山登頂後、弘法清水から火口のへの道を下る。この日はまた、始めから終りまで花また花。二、三日前から咲き始めたというパンダイクワガタは薄紫色の可愛い花である。イワカガミのカーベット、ミヤマキンバイも頂上をはじめ各所に群生していた。

銅沼近くの爆裂火口がよく見える辺りで千葉先生が待っていて、実地で火山や火山灰地層の説明があった。今回は火山の勉強のほかに、花や山菜がありすぎ、植物図鑑片手の人も多く、なかなか忙しい山行だった。終りに、案内してくださった地元

(梅野淑子)

二火会・現地観察会

函南原生林を歩く

梅雨入り前の六月七日、函南原生林の現地観察会を行った。この日はウエストン祭と重なったためか、参



大ブナの前に座り、樹と対話を楽しむ

加者は十八名と少なめだったが、講師の牧内薫氏(森林インストラクター)とともにバスで出発。車中、講師から事前のレクチャーがあり、今日のアウトラインをつかむ。道路の渋滞もなく、富士箱根ランド着。昼食後、実地見学。いきなり有名なアカガシの巨木に出会う。それぞれの樹名を確かめながら道をたどる。下草、低木、中、亜高、高木と見事な五層をなしている樹木の重なりの中、守り育ててきた方々へ「お陰様」の思いを新たにしたい。

今回の観察会は、四月例会のテーマ「森林の遷移」を確認すること、ヒメシヤラがアカガシに追

いやられてゆく道程の検認である。目立つはずの赤銅色のヒメシヤラの幼樹は目に入らず、アカガシは細いもの、太いものと各世代がそろっていることを確認した。

そして、話題となったのは熱帯林伐採の影響よりは二酸化炭素の増加による地球温暖化のもたらす悪。ブナがアカガシにとって代わられるとすれば、それも温暖化が後押ししたため。森林の保水力、浄化力を思えば、水源税のような負担金の導入もやむを得ない、とも思えてくる。

函南は伐採禁止でも蔓性植物は別かと思うのだが、ここではそれも自然のままにして手を入れないらしい。ツルマサキ、テイカカズラなどが多い。さらに、落ち葉の作る土の下には多数の小動物が生息している。

講師と同じ森林インストラクターを目指す人や自然保護委員会のメンバーなどそれぞれの目的、興味の違いが相乗効果をもたらし、楽しい語らいの観察会だった。

そして大ブナ、樹の前に設けられた階段ベンチに座り、人間の十数代を生き続けたものとの対話を楽しんだのである。

(鈴木裕代)

富士山麓の樹海に学ぶ

梅雨の晴れ間の六月十五日、参加

者五名が小岩清水講師自ら運転する車で樹海へ向かう。渋滞が激しかったため、当初予定した範囲をめぐることができず、探索は西湖の西鳴沢氷穴入り口の最も初歩の地帯にとどまった。

昨今、高齢層の登山者が焦ったように多くの山頂を目指し、あたかも山の数で経験を自負するような面も見受けられるが、さてどれだけの人が霧や藪の中から安全に抜け出すことができるだろうか。百名山を振りかざし、名譽であるかのように、両面に刷り込んである名刺をいいたたりすると、日本山岳会が謳っているアルピニズムを改めて問いかけたくなる。

私たちは、初歩の学習として五〇メートルのテープを使って、交互に先頭を交替しながら、ほぼ真っ直ぐ西へ移動することを学んだ。講師は黙って隊列についているだけで、終始先頭者の意思に任せている。後続の者は、例えばコースが東に振れてもヤジってはいけない。わずかの木洩れ陽の樹林の中で踏み跡はなく、傾斜と陥没地形を正しく進もうとするあまり、つい足元に神経が集中し、テープは大きく弧を描く場合もあり、太陽がないと南北を前後することもある。

出発地点で一〇〜二〇メートル先

を目標にしても、樹林帯の特異性から近づくとも似たような樹木ばかりになる。地域部分によっては一パスも当てにならない。リーダーの確固たる信念と、正しい勘、本能のたけていることが要求される。

私たちは約四時間、テープ三巻を使用し、初級の第一歩を学習したにすぎないが、大半が四十年の山歴を持っていながら、このわずかの樹林帯に深々と頭を下げなければならなかった。これから本命の青木ヶ原に挑戦するまで、果たして寿命があるだろうか。

最近のより高きを求めがちな傾向に、もっともっと自然の中で何を得たのかを考え直す必要性を覚えた。整備されたコース、作ってもらったバック山行、至れり尽くせりの案内など、参考にするのはよいとしても、どんな難所でも自然からの教えを身につけることの大切さを習得したい。二火会は引き続き樹海講座を予定しています。(宮澤美渚子)

丹水会・第三十二回例会

藤野芸術の家・石砂山

五月三十一日夕刻、神奈川県立藤野芸術の家に会員が集まった。

ここは様々な芸術体験ができる滞

在型の芸術活動施設で、快適な宿泊設備も整っている。今回の講演は、丹水会創立から会の運営を一手に担い、今春まで芸術の家館長を勤められた古谷聖司さんが、「丹沢回顧」と題して、五十年にわたる丹沢との関わりを話された。

十歳の頃から秦野のぼでい山(三ノ塔)へ下駄履きで登り始め、やがて県庁山岳会に入り、ライフワークといえる丹沢の地図執筆に関わるようになった話など、興味深く聞いた。また、膨大な写真のコレクションか



48名の大パーティーで丹沢主脈を裏側から眺める

ら貴重なスライドの上映があり、当時の登山スタイルや、表尾根の大雪に参加者は見入った。

講演の後はテラスでバーベキューパーティーを楽しみ、懇談は夜半まで続いた。

翌日は好天に恵まれ、菅井から入山して、東海自然歩道の一部をたどり、石砂山から篠原へ、さらに石老山へ登り返して相模湖へと足を延ばした。えこの木、ホタル袋などの花が咲く中を、丹沢主脈を裏側から眺めながら、気持ちのよい山歩きを楽しみ、解散した。参加者四十八名(狩野芳郎)

92同期会・第四回懇親山行

三頭山

武蔵五日市駅からバスで五十分、多摩秋川上流の都民の森に集合したのは十二名の会員(ゲストを含む)でした。実施日が六月十五日とあって、梅雨の洗礼を受けることは避けられないだろうと覚悟しておりましたが、案に相違して、当日はまったくの快晴となりました。一行は富士

今年もさくせんて会いましょう

山登頂二百九十八回の大貫金吾幹事をリーダーに、午前十時、近くの三頭山を目指しました。

この山は山頂直下までブナ、ナラ、ダケカンバなどの広葉樹がふんだんに残されていて、さまざまな形の緑したたる葉と、木洩れ陽の落ちる山道を、思い思いに満喫する山行となりました。また、このコースは小鳥が多いのに驚かされました。樹種の豊富さとそれを育む水分を含んだ落ち葉堆積物、そこに生息する各種昆虫の種類の多いことなどが、小鳥を呼び寄せるのかもしれない。

山頂では、御前、七ツ石、黒岳などの眺望を心ゆくまで楽しむことができました。ここで七千メートル級の高峰を踏破してきたベテランの渡辺玉枝さんがコーヒーマービスをしてくださり、会員一同いたく感激いたしました。

せっかくここまで来たのだからと、山頂で急遽話がまとまり、帰路は西原峠經由数馬の湯に下ることになりました。ひと風呂浴びて汗を流そうということになったわけですが、この柔軟さで92同期会の今後の活力を予見できそうです。(沼田俊雄)

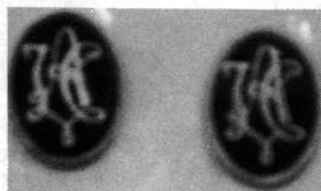


JAC英字型
タイ止め
¥3000
長さ4.3cm

丸型ワッペン
(2枚1組)

¥1000

タテ6cm×ヨコ4cm



携帯灰皿缶
(ベルト通しつき)

¥1500

高さ8cm×直径5cm

ポイ捨て、山火事防止及び清掃用



ダクロンTシャツ(半袖) ¥2500

色: ワインレッド ブルー イエロー グリーン グレー 紺



折りたたみ杖
(低山ハイキング用)

¥4600

色: 黒 ブロンズ

サイズ: 87cm 83cmの2種

ケースは長さ30cm

JAC ORIGINAL GOODS Shopping Guide

●日本山岳会には、JACのマークや文字をあしらった製品、および刊行物が多数あります。実物見本をルームに展示していますが、普段ルームにお越しになれない方々へのサービスの 일환として、誌上でご紹介します。写真は代表的なグッズ、新製品です。

●お問い合わせ・購入希望の方は事務局へ。なお、グッズには郵送料金が加わります。

●総務委員会では新しいグッズの開発を心がけています。会員の皆さまの「こんな物が欲しい」「こんな物があれば楽しい」といったグッズのアイデアを募集しています。皆さまの提案は積極的に採用し、いっそう充実したJACグッズにしたいと考えています。

日本山岳会販売品リスト

1. 山岳会オリジナル製品

*ネクタイ(正絹 色: エンジ・紺)	¥5000
*ネクタイ止め(銀製)	¥2500
*バッジ(正章: 銅製・番号なし)	¥700
*バッジ(略章: 七宝製)	¥700
*バッジ(ピン式・タイタック: 銀製)	¥1500
*ループタイ(液晶)	¥2500
*ループタイ(七宝)	¥2000
*ビッケル型・ブローチ	¥2500
*JAC英字型・ブローチ	¥2500
*JAC英字型・タイ止め	¥3000
*タイ止め(チョモランマ)	¥500
*タイ止め(マカルー)	¥500
*Tシャツ(ダクロン・長袖)	¥3500
*Tシャツ(ダクロン・半袖)	¥2500
*Tシャツ・マナスル(綿・半袖)	¥1500
*ポロシャツ(ウール他・長袖)	¥8500
*ベナント	¥1000
*丸型ワッペン(2枚1組)	¥1000
*スタッフバッグ(小)	¥500
*法被	¥8000
*織ネーム4点セット	¥600
*テレフォンカード(3枚セット)	¥1500
*VHSビデオテープ(マカルー東稜「未知への挑戦」)	¥3000
*VHSビデオテープ(「カンチェンジュンガ」)	¥3000

2. 山岳会刊行物

*「山岳」総索引(1~80)	¥18000
*会報「山」	¥150
*会報「山」合本(501~550)	¥8000
*「山岳」復刻版(2-3)	¥1500
*「山岳」復刻版(3-1)	¥1500
*「山岳」復刻版(3-2)	¥1500
*「山岳」復刻版(44-1)	¥1500
*'88 チョモランマ写真集(日本語版・英語版)	¥2000
*'92 ナムチャバルワ写真集	¥5000
*'84 カンチェンジュンガ報告書	¥3000
*日本山岳会・創立趣旨書	¥500



恒例の山の歌の合唱

信濃支部

第五十一回ウエストーン祭

恒例のウエストーン祭も昭和二十二年六月十四日雨の中で行われた「ウエストーン碑復旧式」から数えて五十一回目を迎えました。

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

六月七日快晴、朝六時鳥々、ウエストーン師の歩かれた徳本峠越え記念山行の出発です。信濃支部塚原総務委員の司会で田中支部長挨拶、木挽安曇村助役の歓迎の言葉、山行リーダー金井伸支部員からの注意事項伝達の後、六時十五分出発。

先行するエーデルワイスクラブの会員約二十名や、信大の学生約百二十名、安曇の小中学校の生徒、PTA、先生約百名を合わせ四百名を超える山行です。全国各地からの一般参加者、村木前会長など本部の皆さん、地元松本営林署長、環境庁の若手グループ、支部の常連さんたち、地元テレビ局の撮影隊と、参加メンバーは多士済々です。

二俣の車道の終点まで約七キロ、トイレが設置されていて、ここからいよいよ山道になります。谷筋の道を行くと所々にベンチがあり、朝日に映える新緑が目に入ります。岩魚留小屋で約十一キロ。二輪草やツツジ、小梨の花に迎えられ、峠道に入っていくと、眺望も段々とよくなり、やがて峠の小屋の人数が響くようになります。そして峠着。ここまで約十六キロ。

この季節、天気がよいと午前中早い時間であれば、峠から明神岳、穂高岳がよく見えますが、午後になるとガスが湧いてきて山頂の見える確

率は少なくなり、今日も十二時頃には山頂は隠れてしまいました。

夜六時、上高地アルペンホテルにて斎藤会長、村木前会長外本部の役員の皆さん、吉村前福岡支部長などのお客さまをお迎えして前夜祭を実施しました。

翌六月八日快晴、十時より碑前祭を実施。第一部式典の部、古幡開太郎支部員の進行で、田中支部長の開会挨拶、地元安曇小四年生によるウエストーン師レリーフへの献花、エーデルワイスクラブ、安曇小の皆さんによる「ウエストーン祭の歌」の献歌の後、師の遺徳を偲び、山に逝った多くの友のご冥福をお祈りするとともに、山を愛する皆さんの登山の安全を祈って黙禱。そして、斎藤会長の挨拶、来賓代表安曇村村長の挨拶と進み、最後に松林のり子支部員による尾崎喜八先生の詩の朗読が行われ、式典の部が閉じられました。

ウエストーン祭の歌は、岡村精一会員作詞、辻壮一永年会員作曲であり、昭和四十八年第二十七回ウエストーン祭で披露されたものです。また尾崎喜八先生は、第二代信濃支部長であり、かつては毎年ウエストーン祭の朝に詠まれた詩を自身で朗読されておられました。今回の詩は第十七回昭和三十八年六月二日に詠まれたものです。

引き続き第二部記念行事の部に入りました。金井記念山行リーダーによる山行報告の後、中村純二前副会長・評議員が「ウエストーン碑のことなど」と題して記念講演を行いました。ウエストーン師のレリーフの変遷、信濃支部によるウエストーン祭の後、各地に生まれているウエストーン記念行事の紹介と、ウエストーンサミットの提唱をされました。

最後に、坂倉登喜子名誉会員率いるエーデルワイスクラブ、安曇小四年生の皆さんを中心に山の歌を合唱して、来年の再会を約し、第五十一回ウエストーン祭を閉会しました。

(穂効康治)

北海道支部

岩登り同好会・小樽赤岩

北海道支部は会員が二百名を超す所帯となり、年に四、五回程度の行事では会員の要望に十分に應えることができない。それを補う意味で様々な同好会活動ができるよう、いま組織作りに取り組んでいる。

手始めに小樽赤岩で岩登りトレーニングを行うことになった。ここは北海道の岩登りのメッカで、昭和初期に北大山岳部や小樽在住の一原有徳会員が開拓した岩場である。最近

励む登山者で賑わっている。

六月七日朝、井後夫妻、三和、岸西野、米村、上島、真下、高澤の九名が赤岩峠に集合。あいにくの霧雨、数日來の雨で自然遊歩道は泥濘。小樽の沼崎会員がつけてくれた笹藪の道を濡れながらたどり、急なガレ場を靴を泥まみれにしながら「三つの岩塔」へと下る。

ドリヨク岩基部で準備していると、薄日が差し始め、青々とした日本海が眼下に広がり、見上げる岩壁は一層屹立している。

三和会員の指導で最初はクラック状のリッジルートで、忘れかけていたザイルワークを復習する。ついにかぶり気味の脆い垂壁のバンドルートに取りつく。バランスに苦勞しながら途中で断念したり、執念深く幾度もチャレンジして頂頭に立った者もいた。

このような行事は今後も続けたいものである。(高澤光雄)

宮城支部

寒風山山行

仙台の奥座敷といわれる昔からの名湯・作並温泉を通り、山形へ抜ける関山峠は指折りの紅葉の名所であり、春の新緑も目に眩しいばかりである。その関山トンネル入り口の脇

から山に分け入り、宮城県と山形県の境界線に沿って北へ登る寒風山(二一七一メートル)が、宮城支部

六月の自然保護山行であった。

暇なく車の行き交う作並街道より登山道に入ると、鬱蒼としたブナの間でたちまち車の音も消え、エゾハルゼミの大合唱である。思いがけない晴天に恵まれ、時々吹く風もさわやかで、ホトトギスやウグイスの声

が耳に心地よく、足元には涼しげなシダが一面に緑を広げている。

勾配のある道をたどり、一時間ほどで九九五メートルのこぶの背に着く。そこから頂までは眺望のよい稜線歩きとなり、誰が名づけたのか「おおの背」のピークを越え、東に泉ヶ岳、北に船形、仙台カゴ、そして南方には面白山や蔵王連峰と、東北の優しさに満ちた山脈に囲まれ、まるで深山の趣に浸りながら寒風山の頂に立った。

周囲の峰々は原生林を思わせるほどの自然味にあふれ、この山道を拓いた時の辛酸の話を聞き、その方々に感謝せずにはいられない気持ちになる。頂付近にはマイヅルソウがまだ白い蕾のまま群生していた。

昼食はこぶの背で、幹事の心尽くしの鯉のご馳走。まさに「目には青葉山ほととぎす初鯉」の風情たっぷり。大きなリュックを担いだ笹笥採りの

二人連れに出会い、この辺りで熊と鉢合わせして以来、二年ほどは恐しくて来られなかったとの話を聞いた。その笹笥を下山中、足元から今夜のおかずに一握りほど手にし、身体中にフィトンチッドをため込み、充実にひたりながら静かな山を下りた。山にはゴミが全然なかったのも印象に残った。(高野笑美)

岐阜支部

台湾の能高山へ登頂

能高山登山隊・高木碕男隊長以下十四人は、五月一日から八日にかけて台湾に遠征し、能高山(三三二一メートル)へ全員が登頂した。

一行は五月一日正午、中正国際空港に到着。ロビーでは中華民国山岳



能高山頂上に立った14名の隊員

協会祭禮樂会長らから「歓迎日本山岳會岐阜支部能高山登山隊蒞華」の横幕を掲げて出迎えをいただいた。夜は同協会が催してくださった歓迎会に出席。蔡会長から「昨年の中華民国山岳協会訪日友好登山に際しましては、槍、穂高岳で大変お世話になり、ありがとうございました」とご挨拶をいただき、今回の山の案内をしてくださる中山協の莊再傳さん、葉明超さん、除志潤さん、張輝國さん、賴慧全さん五名の紹介があり、その後賑やかに懇親した。

二日、バスで台北市から能高山地域の蘆山へ移動。途中、台中市警察局に立ち寄り、入山許可を受ける。

三日、七時にバスで出発。南投県警察局仁愛分局へ立ち寄って入山届をすませ、八時に標高約二〇〇〇メートルの屯原登山口に着いた。この辺りは松、檜、檜が生い茂り、樹木の間から鶯のさえずりが聞こえている。登山準備をすませ、莊さんを先頭に八時二十分出発。登山道は高圧線の巡視路を兼ねており、整備の行き届いた道である。

登山口から、能高山主峰を右側に眺望しながらトラバースし、緩やかに登り標高二八六〇メートルの今日宿泊予定の天池山荘へ十五時に着く。管理人のいる山荘で、この日の宿泊者は私たち十九名だけであった。

四日、三時起床、五時に莊さんを先頭に出発。早朝とあって小鳥がさえずり、天気もよく、さわやかである。四十分ほど登ると、尾根の峠にたどり着く。高圧線工事の完成を記念して建てられたという高さ一〇メートル余の石碑に着き、ひと息入る。

ここで巡視路は高圧線とともに花蓮果へと下っており、登山道は小道となる。辺りは五〇センチほどの笹で覆われている。尾根の両側には池塘が点在し、視界もよく、能高山主峰を前方に望みながら登る。八時に賀爾山(三一八メートル)の峠に着き、大休止。

頂上直下、やや急斜面を何度も小休止しながら登る。そして十時二十分、全員が無事頂上に立つ。隊長の音頭で「能高山万歳」を三唱し、登頂の喜びとともに称えあう。ビールで乾杯し昼食。頂上からは南湖大山雪山、中央尖山、大霸尖山などの山並みを遠くに眺望することができた。

十一時、莊さん、隊長を最後尾に隊列を組んで下山にかかり、全員無事天池山荘へ下った。行動時間が十二時間余とあって皆相当に疲れており、夕食もそこそこに休んだ。

五日、天池山荘を六時に出発し、屯原登山口に十時に着いた。バスで蘆山に下る途中、仁愛分局で下山報

告を行った。

六日、蘆山から中部横貫道路に入り、武嶺で下車、合歡山(三四一七メートル)に約一時間かけて登った。頂上からは一昨日登った能高山など三六〇度の山並みを望むことができた。帰りはタロコ国立公園のタロコ溪谷を観光して花蓮市に下った。

七日、花蓮市から海岸道路の景観を楽しみながら台北市へ帰る。

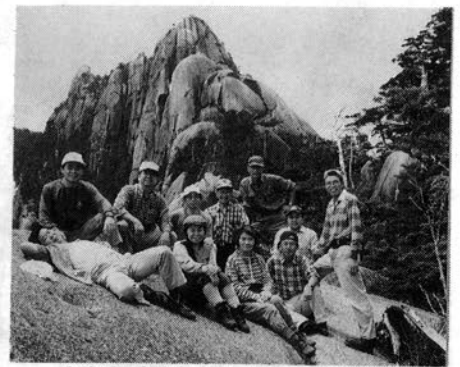
夜、台湾でお世話になった中山協の方々を招いて下山報告と答礼会を開催し、隊長から「莊さんら五人の案内により、全員能高山へ登ることができ、ありがとうございます」とお礼の挨拶をした。蔡会長ら二十五人の中山協の仲間が駆けつけてくださり、登頂のお祝いの言葉をいただいて大いに盛り上がり、両国の友好を深めた。八日、帰国。(清水芳彦)

宮崎支部

ササユリ山行

■岩峰と色っぽい花

幾重にも群青の縞をなす山脈と花崗岩の群白、その巒に咲くササユリ観賞に大崩山(一六四三メートル)へ行こう、今年の開花は一週間早いぞ、との花便りに急かされて、山行は梅雨の晴れ間の六月十四日に決行された。会員十二人は、午前五時宮崎市J Aを出発。一路、国道一〇号



小積ダキ岩峰上にて、後方は和久塚岩峰

を北上し、八時十分登山口着。すでに福岡・長崎・熊本ナンバーの車が先着している。

大崩山の持つ魅力は、モミ、ツガ、ブナ、カエデ類、ヒメシヤラなど樹齢二百年以上の混合樹林の原生林と、ブナ、ドウダンツツジ、ツクシアケボノの大群落、ササユリの自生など一九科五七六種の植物。加えて花崗岩の尖峰と絶壁の景観からなる格調の高い山水画的な大パノラマである。

八時三十分登山開始、大崩山山荘を経由して、三里河原の分岐点から祝子川上流を渡渉して小積ダキ、和久塚コースの急登を目指す。祝子川支流沿いの溪谷は深く、野鳥の宝庫でセンダイムシクイ、ウグイスなどのさえずりは一服の清涼剤だ。溪の水は幾重もの落ち葉のジュータンを

くぐり抜け、花崗岩が風化して砂状になった真砂土でさらに清澄に濾過され、溪流は飛沫を上げて岩を飛び越えている。

苔むす岩場の上にヤマツツジの朱色の花が彩りを添える。急坂に這いつくばりながらよじ登る。息が切れ、肩で呼吸してはまた一歩と同じ所作を繰り返す。しかし、弱音をはいく者はいいない。ササユリと岩峰との再会や初対面に心が動かされ、燃えているからであろう。

登山開始から二時間三十分、小積ダキの岩影に咲くササユリを発見、「アッター」の一声は岩峰にこだまし、乱れていた呼吸が止まる。二十四の瞳が一点に集中する瞬間である。ササユリは、写真で見えて高山に咲く可憐な乙女の花と考えていたが、香りも強く化粧をした妖艶さのあるおもむきといった感情は私ひとりではなさそうである。

■無尽蔵でない自然

早発ちであったため全員空腹を主張、ササユリを観賞しながらヒメコマツ、ベニドウダンの木漏れ日の下でビールで乾杯。握り飯を頬ばりながら、歌人若山牧水の人・山・花・酒にまつわる短歌の紹介が始まる。さわやかな風に葉ずれの音を聞く最高のディナーショーだ。

さあ、血液が腹部に集中したところ

ろで出発。

再び苦行の登りが続く。下・中・上和久塚と岩峰の巒を巻きながら二時間を要して「リンドウの丘」の絶壁に立つ。三つの和久塚から小積ダキまでの岩峰とヒメコマツの白骨に組み合わされた造形はまさに絶景。固唾を飲みしばしたらずむ。「すごい・綺麗・山水画だ」の評価が飛び交う。自然の造形力に感嘆し、絶賛する以外に言葉はない。やがて靄がかかり始める。梅雨前線のいたずらか雨も近い。先を急ごうとするがシヤッターの音が続く。

リンドウの丘はブナの群生する原生林だ。ここからは一気に下りになる。

下山の所要時間は二時間三十分。遥か彼方の山巒の緑の中にひとときわ鮮やかに輝いているヤマボウシは自己主張して存在をアピールしている。渡渉点では、ひからびた顔を洗い喉を潤す。水がうまい、自然に感謝、感謝。

近年、とくに自然保護活動が活発となり、受動的活動から積極的な行動に移行していることはうれしい。自然は無尽蔵であるという錯覚に陥ってはならないという思いを新たに、この日八時間三十分の山での行動を省みながら家路についた。

(井野元 繁)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

シルクロードの未踏峰

川上 隆

去る三月下旬、新疆烏魯木齊の岳友アルスランさん(現新疆登山協会副秘書長)から手紙をいただいた。彼とは、一九八一年の公格尔九別峰登山以来のおつき合いである。

その後、チャクラギール山群北麓二人行や、炎天下共に汗だくになって喀什人民公園内にある公格尔九別峰登頂記念碑の手入れをしたり、時には場末の屋台でシシカバブをつまみに酒を酌み交わした仲である。九四年以降、自治区体育運動委員会に転じた人と伝てに聞いた。今回の手紙では、今夏も新疆に来るといいうが、ぜひ旧交を温めたいので時間を作ってほしい、という。その後の文通では「今まで多くの日本隊が新疆の山

に入っているが、リーダーはほとんどが日本山岳会の会員という。これから日本山岳会の会員が、個人やグループで登山やトレッキングを目的に来訪されるならば、最優先で受け入れます」とのことである。

私は、かねて天山や崑崙の未踏峰を自分なりにまとめようと思っていた矢先なので、この機会を利用して早速ご教示をお願いしたところ、快く引き受けてくださった。彼の弟分にあたる努尔さんも協力を惜しまず、資料を提供してくださった。

以下西部天山山脈と、中部崑崙山脈周辺域の六千メートル級の未踏峰を、簡単に紹介したい。本文の山の位置については、市販されている「青藏高原山峰図 中国国家測繪局 中国登山協会編集二五〇万分之一」を参照していただきたい。

一、西部天山托木尔峰、汗騰格里峰

周辺の未踏峰 登山シーズンは六月〜九月。

●未踏峰 六〇〇メートル級の山は七座 ①台蘭乔峰／六九三四メートル ②克其克台蘭乔峰／六八七六メートル ③琼庫孜巴依峰／六五八八メートル ④琼庫孜巴依乔峰／六一三五メートル ⑤却勒博斯峰／六七三一メートル ⑥科学峰／六五八八メートル ⑦吐格拜勒齐乔峰／六八五九メートル

●台蘭乔峰、克其克台蘭乔峰、琼庫孜巴依峰、琼庫孜巴依乔峰への入山ルート ①ウルムチ→空路→阿克苏(泊)→車→塔格拉克牧场(泊)→馬→克其克台蘭水河末端BC着 ②阿克苏→車→破城子(泊)→馬→科克其水河末端BC着 ③阿克苏→車→小台蘭(泊)→克其克台蘭水河末端BC着

①、②、③ともに、馬を利用したキャラバン三日でBC。ウルムチから五日でBC着。水河末端高度は四二〇〇メートル前後である。

●却勒博斯峰、科学峰、吐格拜勒齐乔峰の三峰は、入山ルート不明。

西部天山で、公式に外国人に登山を解放している山はトムール峰(七四三三メートル)のみである。しかし、未踏峰でも申請次第では特別登山許可がもらえる。ハンテングリ峰(七〇一〇メートル)は一時期解放さ

れたが、今は再び閉ざされている。二、中部崑崙の未踏峰(西域南道の干田―且末間の南に聳える山群)

登山シーズンは六月〜九月。

●喀什塔什山群 克里雅河の上流に六六九一メートル峰、その東に六六九七メートル峰がある。この山群には六三〇〇メートル前後の山が三座ある。六六九七メートル峰は、八七年夏と九六年夏に日本隊が試登している。八七年隊は標高五九七〇メートルまで到達している。

入山ルート ①六六九一メートル峰 ウルムチ→空路→和田(泊)→車→ウテン(泊)→車→普魯(泊)→ロバを利用し三日間のキャラバンでBC着(標高五〇〇〇メートル前後)。②六六九七メートル峰 ホータン→ウテン經由崑崙まで車。ここよりロバを利用し三日間のキャラバンでBC着(標高四〇〇〇メートル前後)。他にウテンからケリヤ河沿いに車でカシタシに入るルートもある。いずれもウルムチから六、七日でBCに着く。

●呂什塔格山群 六三六八メートルの他に、六二〇〇メートル級の山が八座ほどある。入山ルートは不明。

●阿克塔格山群 四岔雪峰(六七四八メートル)の他に六五五一メートル峰、六四四七メートル峰、六三〇〇メートル級の山が四座ほどある。

四岔雪峰は四つのピーク(六七四八、六五八〇、六五一五、六四〇八メートル)からなっている。九五年夏ウルムチの友人張保華さん、馬剛さんと崑崙の山を語り合った時、九六年夏には偵察を兼ねたトレッキング隊の派遣を決めた。この隊は結構頑張り、標高四六三〇メートルまで達した。四岔雪峰はこの地点より約二五キロメートル先である。

入山ルート ホータン→車→民豊經由で色日克庫勒まで二日、ここからロバを使ったキャラバン四日でBC着(標高五五〇〇メートル)。ウルムチから七、八日かかる。

この山群は、BCに到達するまで、砂漠やゴビのキャラバンとなるため、連日砂嵐に苦しめられる。年間を通じて、極端に蒸発量が多い山域なので、高度の割に氷河の規模は小さい。三、新蔵公路(シンキョウ、チベットの公路)。麻扎から甜水海周辺の未踏峰 登山シーズンは六月、九月。●マザ周辺の未踏峰 六五三二、六三五四メートル峰など。

入山ルート ウルムチ→空路→喀什(泊)→車→葉城(泊)→車→マザ(標高三七八五メートル)→馬またはロバを使ったキャラバン四日でBC(標高三八〇〇メートル前後)。ウルムチから七日でBCに着く。●唐西瓦付近の未踏峰 六四八一、

六四七八、六三六二、六三三一メートル峰など。

入山ルート マザ→車→カンシワ周辺にBC(標高四二〇〇メートル)ウルムチからBCまで五日間。

●大紅柳灘付近の未踏峰 六七七〇、六六八三、六六七六、六八〇二メートル峰など。

入山ルート マザ→車→ターホンリュウタン經由BC(標高五〇〇〇メートル前後)。ウルムチから六日間でBC着。

●五〇九道班付近の未踏峰 六五九九、六五三四メートル峰など。

入山ルート マザ→車→五〇九道班→馬かロバでBC(標高五一〇〇メートル前後)。ウルムチから七、八日でBC着。

●甜水海(標高四六〇〇メートル)から団結峰六六四四メートル。

入山ルート マザ→車→テイスイカイ經由でBC(標高五〇〇〇メートル前後)。ウルムチから六、七日でBC着。

天山山脈や崑崙山脈は、六〇〇〇メートル級の未踏峰が他の大山脈より多い。登山者は力量に応じて山を選ぶ。未知なるものを求め、手探りで登山する喜びは何ものにも変え難い格別のものである。しかし、実行となると人跡未踏の地なので資料はほとんどない。周辺地域の山や村

落、地形、気象などに関する文献を読み、判断の道標にしたらと思う。さて、いざ登山となれば、まず充実した偵察が必要で、それだけ日数がかかる。一般的に、BCからの登山日数は隊の力量にもよるが、三十日前後は必要であろう。

白神山地問題と組織運営について反論

石田稔郎

会報六二五号に「白神山地問題について、石田稔郎氏に答える」として、自然保護委員会委員長名で、六二二号に書いた私の意見に対して、反論が掲載された。

ところがその反論は、五月の通常総会における村木前会長の表明とは異なり、自然保護委員会の独走に対する反省どころか、自然保護委員会の行為を正当化する主張を繰り返しているのである。

六二二号で私が提案した問題は、第一に「本部と支部の関係という組織上の問題であり、組織上、本部の活動(委員会を含む)は、支部の活動に対して有形無形の援助を行う立場にあるのではないか。第二は「定款上、自然保護委員会が対外文書を発表し、行政等に意見書を提出する

ことは越権行為ではないのか」第三に「対外的な文書は常務理事会等で審議し、会長名で発信されるものではないか」ということである。

六二五号の中で、自然保護委員会は「我々の意見書は理事会で説明を行った上、提出したものであり、慣例に従ったものである」としているが、委員長名で対外文書を出すことは明らかに越権行為であり、提出した文書は無効な文書であると思う。担当の大蔵喜福理事は自然保護委員会の機関紙の中で「この意見書の提出は失敗だった」と反省されている。私が提起したのは組織論なので、回答があるとすれば、担当の大蔵理事か総務担当理事が行うべきものである。

また、六二五号には西口正司氏の「石田氏は青森支部は入山規制に反対と決めつけておられるが、これは事実と異なる。支部には賛成の会員も多いからだ」との意見も掲載された。しかし、西口氏は支部の行事にほとんど参加していない。そういう立場の人が支部決定を云々することは、組織について無知といっても過言ではあるまい。

私の意見を「登山者のエゴ」だの「抗議することはフェアではない」だのというのは、自分たちのテリトリーに他人を踏み込ませないように

しようとする、地域エゴイストの論理のように見えるのである。

対外文書の提出について、理事会の中に若干の混乱があり、自然保護委員会だけが対外文書を起案しているので、理事会がついに見逃してしまっただけが、これまでの経過ではなからうか。

二年半ぶりのネパール

井上 晃

五月初旬、二年半ぶりにネパールを訪れ、ポカラからムクティナートへ、そしてゴラパニからアンナプルナ内院まで足を延ばして歩いてきた。

黄金週間の後だったので、日本人トレッカーにはあまり出会わなかった。それでも会社を退職して、三月からベトナム、タイを回り、これからチベットへ向かうという大阪の青年。休学して昨年十一月からアジア諸国を巡っている京大生。また、マウンテンバイクでカトマンズからポカラ、さらにチトワン国立公園などを走り回ってきたという二十四歳の元気な娘さんにゴラパニで声をかけられた。いずれも単独行の若者たちだった。

アンナプルナ内院への往復に、クディ・ガールのチェック・ポストへ

寄った際、四月からここを通ったトレッカー数を掲示してあったのでメモしてきた。

それによると、四月中にアンナプルナ内院へ入ったトレッカーの総数は千六百十人。国籍は①イギリス二百八十九人②イスラエル二百五十三人③U・S・A六百六十六人④フランス百五十八人⑤オーストラリア百九人、日本人は六十九人と六番目であつた。

また五月第一週(一〜七日)の入山者数は①イギリス五十六人②イスラエル五十四人③U・S・A二十三人④オーストラリア十五人⑤フランス十一人⑥インド十人で、日本人は五人だけと少ない。

第二週(八〜十五日)になると①イスラエル四十一人②イギリス三十八人③シンガポール三十七人④インド二十九人⑤U・S・A二十六人⑥日本十二人となっている。

同行のシュルパの話では、日本人は四月と年末に多い、ということだが、このデータでもそれがはっきりとうかがえる。

また最近、イスラエルとシンガポールからのトレッカーが増えているそうだが、やはりこの数字に現れている。そして、イスラエルからのトレッカーはシュルパもポーターも雇わない、と言っていたが、途中で出

会ったイスラエルのトレッカーはほとんど若い男女のグループで、確かにシュルパなど連れていなかった。

これに対しシンガポールの四十人近い大学生の団体(二グループ)は多くのシュルパ、ポーターを連れた大パーティーであった。私たちはゴラパニから相前後して歩いてしたが、小さな村では私たちのテントを張る場所がなくなり、少し先まで行ったこともあった。

今年はモンズーンが少し早いようだとシュルパの話。中旬過ぎから毎日午後になると激しい雨に見舞われたり、ヒルに悩まされたりしたが、富山支部の友人とシュルパの三人でのもんぴり歩いた三週間の山旅は楽しかった。(富山支部)

日高信六郎さんとの旅

川崎精雄

昭和三十九年(一九六四)秋、山岳会会員諸氏が荒沢岳に登られた。私も一緒に登る心算で、よい機会だからと深田久弥さんをお誘いしたが、都合悪しとのことで、私は一人出発した。

銀山平伝之助小屋に昼頃着くと、皆さん今朝早く登られた、という。私が日を間違えたかと判り、然らばお

迎えにと登って行くと、下山中の日高信六郎さんにお会いした。日高さんは旅行先から回られ、出発も遅かったため、前日から引き返された様子で、会員の古沢肇君が一緒だった。登頂した人たちはその日遅く家路についたため、夜の泊りは日高さん、古沢君、私の三人になった。この溪谷の夜には、私は幾つもの思い出をもつが、この夜はとくに日高さんの豊富なお話を静かに伺えて、忘れ得ぬものとなった。見事な経歴をお持ちになり、日本山岳会会長もされたのに、実社会のことにも山のことに全く謙虚なお話ぶりで敬服した。古沢君と私は日本登高会の仲間でもあるが、二人ともアルコールがからきし駄目で、この夜のお相手には不足だった。

翌日も快晴。日高さんのご予定は舟で銀山湖を往復して帰宅だったから、私は荒沢岳をやめて尾瀬か檜枝岐に回ることにした。舟の上から見る紅葉が美しく、荒沢岳が湖面に映る。この尖頂は私が昭和六年の夏とその後に残雪期に登った時は、せいぜい二人しか立てない程入り「上越の槍」などと呼ばれたが、昭和三十四年に地元で登路をつけた際「なるべく多くの人が立てるよう削って均しました」(第一回山開きの折山頂で確認)というわけで、今湖から仰

いでもやや物足りなくなつた。

三人だけの舟の上は楽しかった。後年私の貧しい著書の葉に一筆お願いした時、日高さんはこの日のことを書いてくださったので、私の下手な紀行に代えさせていだこう。

奥の中ノ岳から平ヶ岳につらなる山なみが、澄みきった空を限り、色づいた湖辺の木立が静かな湖面に影を投げる。舟は人造湖の底に沈んだ浪拝温泉の上を過ぎ、ハヨ止めの滝の上あたりで止まった。陸にあがった川崎君は見返り勝ちに手を振り振り、やがてみちを覆う林のかげに消えて行った。

私の手許には伝之助小屋で、日高さんと並んで撮らせていただいた一枚の写真が残っている。

忘れられていたピッケル

原 謙一

会報六二二号で芳賀孝郎さんの書かれた記事によると「一九二五年にJAC隊がアルバータ頂上に残してきたピッケルは、二十三年後にアメリカ隊によって持ち帰られた。その後、石突き部分が折れてケルンと雪の中に残ってしまったことを知り、探し出して完全な形にしたいと思っている」とのことです。



折れたピッケルの石突きを手に感慨を新にする

一九六五年、我々長野高校OB山岳会隊はアルバータ峰の頂上から石突き部分を持ち帰っていました。当時は第二登のアメリカ隊のものだろうと判断し、いずれ山岳博物館へでも寄贈して、皆さんに見てもらおうつもりでいました。この話は帰国後、三田さん、早川さんへの報告の際伝えたと思いますが、誰もピッケルが折れていたことを知らないで、とくに反応もなく、いつの間にか忘れられ、OB会の棚に眠ったまま三十年以上過ぎてしまいました。

五月三十一日、ルームに関係者が集まり、この現物を前にして話し合ったところ、細川護立氏のピッケルの石突き部分であろうと意見が一致しました。さらに写真をカナダへ送り念を入れて調べています。

我々が登ったとき、石突きはケルンの側に落ちていた状態で、近くに

は記録の入った缶もありました。その中に、さらに小さな缶があり、初登の記録を書き写したものと、第四登までの記録が入っていました。それは濡れてぼろぼろになっていて、文字を読むことはかなり難しい状態でした。我々は、これ以上頂上に置くのは無理と判断して、オーバーリン隊と同様別の紙に書き写し、我々の住所を書いた英文名刺なども加え、新しい缶に入れて残してきました。その後登った人が見つければ、連絡があるのではないかと期待していましたが、何も届かず忘れ去られていました。

記録はほぼ次のような内容でした。

第一登 一九二五年七月二十一日

十九時三十分 横隊 日本人六

スイスガイド三 大がかりな遠征。

第二登 一九XX 十八時十五分

ジョン・オーバーリン、FOアイル

ス、飛行機の偵察後登る。我々は

日本の記録を持ち帰り、新しい記録をこの寒い所に残しておく。叫

び声を挙げなければならぬ。日本隊おめでとう。登攀条件は極めて

厳しいものであったに違いない。

第三登 一九五八年八月十八日

としてカナダ人第一登。ハナス・モ

ーサー(現カナダの有名ガイド)

外四名の名前が書かれていた。十

三時三十分キャンプから九時間半。

第四登 一九五八年八月二十二日、二人の名前があり、一人はガイド。十二時三十分着。イギリス人初登。したがって我々の隊は一九六五年七月二十九日十五時四十分、第五登となりました。

缶は長さ一一・五、直径八・三センチ、多分、緑色だった紙ラベルが貼ってあったものと思われまふ。寒い所にあったためか、メッキがよかつたのか錆はほとんど出ていません。底の刻印は辛うじて読める程度、切り口はギザギザに三分の二ほど切り、折り曲げて開いた状態でした。中の缶はアグファのミニチュアカメラフィルム用で、現像有効期限が一九四一年四月と書かれたラベルが貼ってありました。これは第二登以前の年号ですから、どの隊が持っていたものか興味があるところです。

ピッケルの石突きは、木部断面が長さ二センチの小判型、バンドの八センチ先七・五センチで溶接構造です。木部一〇センチのところに固定リングがついていた跡と釘が残る、その下は艶が残っています。上部は風雪にさらされた状態ですから、ここまでケルンに埋まっていたものと思われまふ。石突き部分はほとんど錆びていませんでした。

いずれどこかで完全な形で展示し、見ていただきたいと考えています。

図書紹介



イラスト 野田四郎

大蔵喜福・著

『彼ら“挑戦者”
新進クライマー列伝』

本書は、日本の三十代前後の若手クライマー二十五名を山岳月刊誌に順次紹介したものを、単行本にまとめたものである。

中高年のハイカーが盛んな今日、若手の尖鋭クライマーの抱えているユニークな発想・こだわり・生き方などを直接本人と対話して紹介。著者は中年をやや過ぎていますが、谷川岳・剣岳で鍛えヒマラヤを夢見て育った自身の若い時期と、現代クライマーとの相違を対比している。

高校卒業と同時に「きらめきの人生」を求めてヨセミテを攀じる若者勤務先と海外遠征との調整に苦勞するサラリーマン・クライマー、「メ

ダカ社会逆進の人生」として山を選ぶ男、「自己主張のない人生なんて屈辱そのもの」とする大学助手など。

最後にヒマラヤを継続的に実践する小西浩文を紹介し、極限の登山を構築していく様には、ほとぼしる闘争心を覗き見る著者は、それが自身の心底でもあるのだろうか。

本書は先に紹介した「ビヨンド・リスク」の国内版ともいえるが、著者の強い山岳思想が入っている点で、読者の好みの分れるところであろう。

(林 栄二)

一九九七年三月 東京新聞出版局
発行 三一九ページ 千四百円

池内 紀／解説

『江上波夫の
蒙古高原横断記』

昭和初期の蒙古高原の旅とはどんなものであったろう。

若い人類学者江上波夫と考古学・地質学・言語学とそれぞれ専門の違う、いずれも二十代半ばの学生が、昭和六年六月末から八月末の満二か月にたどった内蒙東半部の踏査横断記。学術報告とは別に一般向きにつづられ、昭和十二年に朝日新聞社より刊行されたものの、第一章「シリ・ン・ゴル紀行」を池内紀が現代表記に改め、漢字・俗字を一部仮名に変

えて新たに編集したものであり、大変読みやすくなっている。

終始土匪の恐怖と、過酷な自然の中の一五〇キロメートルは、さしたる大事件に遭遇することはなかったものの、まさに夢の大冒険、興味深い探検の旅である。(渡邊玉枝)

一九九七年一月 (株)五月書房発行
一九九ページ 千七百円

麻布学園山岳部・第八号

『岩燕』一九八六―一九九五

「麻布学園」は、創立百年余の歴史を持つ名門校であり、卒業生には著名人も多く、現総理大臣・橋本龍太郎氏もその一人。山岳部の創立は、終戦の翌年一九四六年(昭和二十一年)旧制麻布中学を前身として誕生、昨年創立五十周年を迎えた。

『岩燕』第八号は過去十年間の部の活動をまとめたもの。まず中村太郎山岳部OB会長は「時代の節目に立って、これからも山岳部を縁に山登りを続けてほしい」と述べている。かつての時代の部長先生や代表指導委員が記す「回顧」は、単に「思い出」にとどまらず、クラブ活動の在り方を示唆している。報告記事としては会の十年間にわたる「合宿報告」がある。そして座談会「AACの五十年をふりかえる」では、昭和二十

味の技、心でつくる



むさし 坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有明町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし 坊 麹町店
(有明町線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし 坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友藤ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし 坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

三十年代卒業のOBと若手OBの二部に分け、それぞれの時代の推移の中で、登山界と山岳部活動の様変わり語る。貴重な記録だ。

麻布学園のOBは、なぜか日本山岳会の会員が多く、二十数名が在籍しているという。山仲間の絆の強さを物語るものであろう。学校山岳部の現役部員が少ない昨今、麻布学園山岳部もその例外ではない。山岳部の継続はOB会員の活躍があつてこそ次世代が育つもの。創立半世紀の節目に立ってさらに飛躍することを期待したい。

一九九六年十一月 麻布学園山岳部発行 二四九ページ 非売品
(羽田栄治)

書籍受入報告 (1997年5～6月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
串田孫一	北海道の旅 (平凡社ライブラリー No. 198)	332pp/17cm	平凡社	1997	出版社寄贈
鈴木盛彦	わが山行: (附) 東京医科大学エベレスト高山医学研究所診療日誌	107pp/27cm	鈴木外科内科医院	1989	著者寄贈
宮下啓三	日本アルプス: 見立ての文化史	250pp/20cm	みすず書房	1997	著者寄贈
湯浅道男(著)本郷三好(編)	たかが山登りされど山登り	258pp/22cm	成文堂	1997	著者寄贈
上條武	上高地 (第3集): 河童橋考	373pp/22cm	独木書房	1997	著者寄贈
片山英一	私のブーテン: カメラ紀行	319pp/31cm	片山英一(私家版)	1997	著者寄贈
渡辺寿宗	銅版画: JUSO COPPER PRINT WORKS	119pp/26cm	清水弘文堂書房	1990	著者寄贈
岩田修二	山とつきあう (自然環境とのつきあい方 No. 1)	146pp/19cm	岩波書店	1997	著者寄贈
石井光造	すぐ役立つ「山を楽しむ地図読本」	174pp/19cm	東京新聞出版局	1997	出版社寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング・バス時刻表 (近畿版・97夏秋号)	447pp/19cm	書苑新社	1997	出版社寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング・バス時刻表 (関東版・97夏秋号)	478pp/19cm	書苑新社	1997	出版社寄贈
静岡新聞社 (編)	新狩野川紀行	111pp/21cm	静岡新聞社	1996	編者寄贈
静岡新聞社 (編)	先蹤者に捧ぐ: 遙かなり南アルプス-石間信夫の山旅たどる-	18pp/19cm	静岡新聞社	1997	編者寄贈
串田孫一 他 (共編)	穂高岳 (日本の名山 第10巻)	268pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
一戸義孝	花の山旅・みちのくの山: みちのく 6 県32の花の山々	229pp/20cm	実業之日本社	1997	出版社寄贈
荒井魏 (編)	日本三百名山	319pp/26cm	毎日新聞社	1997	出版社寄贈
斎藤重一	鳥海山	369pp/22cm	なんば書房	1997	著者寄贈
遠藤ケイ	遠藤ケイの野外生活手帳	241pp/22cm	日本放送出版協会	1997	出版社寄贈
札幌山岳連盟 (編)	烈風の頂きに立ちて: ランタン・リルン南東稜	150pp/27cm	札幌山岳連盟	1996	発行者寄贈
高橋定昌	日本岳連史: 山岳集団50年の歩み	472pp/18cm	出版科学総合研究所	1982	購入
細川清徳 (編)	アラスカ総覧 (1989)	286pp/26cm	アラスカ会	1989	発行者寄贈
内田嘉弘	京都丹波の山 (上巻): 山陰道に沿って	241pp/20cm	ナカニシヤ出版	1995	著者寄贈
内田嘉弘	京都滋賀南部の山	246pp/20cm	ナカニシヤ出版	1992	著者寄贈
高橋三雄 (監修)	わかりやすいコンピュータ用語辞典	715pp/18cm	ナツメ社	1996	岩淵泰郎氏寄贈
岩坪五郎 (編著)	森林生態学 (現代の林学 第12巻)	306pp/22cm	文永堂出版	1996	編者寄贈
村西博次 (編著)	仏和山岳用語集: 登山・クライミング	182pp/19cm	ナカニシヤ出版	1997	著者寄贈
	山スキーのフランス語とカタカナ日本語の語源研究				
遠藤ケイ	賢者の山へ	254pp/22cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
永田芳男	樹木・春夏編 (山溪フィールドブックス No. 16)	335pp/19cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
井上重治	カラコルム氷河紀行: Photo & Poem	102pp/31cm	山と溪谷社	1997	著者寄贈
自然環境研究センター(編)	新・美しい自然公園(第14巻): 十和田八幡平国立公園「八幡平」	48pp/34cm	自然公園美化管理財団	1996	発行者寄贈
NHK放送文化研究所(編)	NHK気象ハンドブック [改訂版]	272pp/22cm	日本放送出版協会	1996	出版社寄贈
日本放送出版協会 (編)	中高年のための登山学: 日本百名山をめざす(NHK趣味悠々)	173pp/26cm	日本放送出版協会	1997	出版社寄贈
田部井淳子	さわやかに山へ	111pp/21cm	東京新聞出版局	1997	出版社寄贈
東京雲稜会 (編)	高いばかりが山じゃない: 追悼・羽賀正太郎	398pp/22cm	東京雲稜会	1996	発行者寄贈
松方三郎	アルプス記 (平凡社ライブラリー No. 203)	341pp/17cm	平凡社	1997	出版社寄贈
串田孫一他 (共編)	八ヶ岳 (日本の名山 第12巻)	269pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
田中澄江	私はいつでも山に登りたい	206pp/20cm	大和書房	1997	出版社寄贈
新妻喜永	東京付近のんびりゆったり山歩記: フォト&エッセイ・ガイド	277pp/20cm	実業之日本社	1997	出版社寄贈
川原勝征	屋久島花草木 (世界自然遺産の島): 続・屋久島の植物	191pp/19cm	八重岳書房	1997	出版社寄贈
藤木高嶺	あゝ南壁: 第2次RCCエベレスト登攀記(中公文庫 No. 629)	255pp/16cm	中央公論社	1997	出版社寄贈
追悼文集編集委員会(編)	追悼・土倉九三	322pp/22cm	土倉事務所	1997	発行者寄贈
栗林一路	変貌するアルピニズム	44pp/26cm	栗林一路(私家版)	1997	著者寄贈
関西岩峰会 (編)	遙かなる高みをめざして: 関西岩峰会創立35周年記念誌	178pp/26cm	関西岩峰会	1997	発行者寄贈
稲本正	木の聲	250pp/22cm	小学館	1997	出版社寄贈
Erling G. Kagge	Alone to the South Pole	131pp/29cm	Morbok	1994	著者寄贈
Yossi Brain et al.	Trekking in Bolivia: A Traveler's Guide	223pp/21cm	Cordee	1997	出版社寄贈
John Biggar	The High Andes: A Guide for Climbers	160pp/21cm	Andes	1996	堀内章雄氏寄贈
Nepal-Nippon Research Center (ed.)	Library Contents: Seek, Search, Share	29pp/29cm	N-N Research Center	1997	発行者寄贈

会務報告

【六月理事会】

日時 六月十一日(火)十八時三十五分

二十時三十五分

場所 日本山岳会会議室

出席者 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、大屋、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鰐坂、増山、森、宇田川、宮崎坂本各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、中川、平野、中村各常任評議員

【委任】 大蔵理事、長尾常任評議員

【審議事項】

(一) 常務理事委嘱と担当委員会委嘱の件 斎藤会長

大屋、吉永、田邊、伊丹、熊崎各理事に常務理事を委嘱する。伊丹理事海外連絡・高所、熊崎理事指導・遭難対策、宇田川理事青年部委員会と一部担当を変更しての委嘱とする。

(二) 画集「日本の名画」(郷土出版)推薦の件 大屋

明確な企画提示の連絡を待ち、再審議に。

(三) ウェストンに関する写真、資料

撮影許可の件

大屋

(例) 信越放送より「緑輝いてウェストンの愛した上高地」(仮題・放送予定は六月二十四日(火))の番組中で使用の資料として「河童橋上のウェストン夫妻」他三点の写真・資料の撮影許可願が出された。

(四) 名義後援依頼の件 大屋

① 同好会・アルパインフォトクラブの羽田代表より、六月五日(土)日、上野松坂屋で開催の「夏山相談所」会場内で、同会の山岳写真展開催の依頼があり、宣伝文に「協力・日本山岳会」と記載したい旨、書面をもって要請された。

② 東京都山岳連盟会長より、十月十日(金)十一日(土)実施の「第五回日本山岳耐久レース」(長谷川カップ)に名義後援を要請された。

(五) 演劇公演「K2」の後援依頼の件 大屋

「加藤健一事務所」より表題の公演に対し後援依頼を要請されたが、討論の結果演劇に対する後援は不適当と判断、不許可となった。

(六) 会報記事転載許可願の件 大屋

「林田正幹」遺稿・追悼集」編集委員・松田雄一(会員より、「山」六一九号掲載の「追悼・林田正幹さん」山の友よ」(石田喜八会員寄稿)の転載依頼がなされた。

(七) 名義使用・推薦状要請の件 承認

① 名称「日本山岳会青年部ダウラギリ峰登山隊一九九七」

② 目的 ダウラギリ峰(八一九七メートル)北壁「梨」ルートからの無酸素登頂

③ 隊の構成 五大学現役・OB七名とBCマネージャー一名計八名

④ 登山日程 八月二十一日日本出発九月七日登山開始、十月末帰国予定。

出席の松原隊長より、ルートなどの説明と挨拶があった。

(八) 推薦状発行要請の件 宇田川

宇田川

明治大学山岳部炉辺会より「明治大学アンナブルナイ峰登山隊一九九七」に対する東京都山岳連盟の推薦状発行を、本会より要請するよう要望された。

出席の山本隊長より、ルートなどの説明と挨拶があった。

(九) ルーム・事務局は八月十一日(月)十六日(土)を夏休みとし、閉室する。

(十) 財務委員会より債権の件 吉永

「銀座好日山荘」の倒産により本会に債権(未収金)十万円が発生するが、弁済能力の不足とこれまでの好意に対して、その権利を放棄することとしたい。

了承

【報告事項】

● フィルムビデオ委員会・鰐坂

① スイス観光局より山岳・トレッキングなどに関する複数のフィルムの寄贈を受けた。順次ビデオ化していくが、贈呈に対し会長名で礼状を送りたい。

② ビデオカセットの貸し出し料五百円を、今後は三百円にしたい。支部などへの送料は受益者負担とする。

③ 第八次マッキンリー気象観測機器設置登山隊について・絹川

六月十二日大蔵理事帰国、十四日アラスカへ飛び、十八日先発隊と合流、登山活動に入る。これまで、学生・青年登山者の育成に果たした役割は大きい。来年度も継続するのであれば、青年育成の基本として本会での予算化と、学術的見地から現地アラスカ大学との提携が望ましい。

検討を希望する。

● マーキング・エベレストデーについて・神崎

五月二十七日よりネパールでのイベントに参加した。E・ヒラリー卿などの古い話に終始。本会としては入山料の値下げを要望した。翌日、クリシユナ本会名誉会員の急逝に際し弔問、その折事務局長(娘婿)に日本から依頼された資金を手渡した。

● ウェストン祭について・大屋

六月七(八)日、信濃支部主管で開催。七日の徳本峠越えは村木前会長

以下四百名を超えた。八日は斎藤会長、小倉、竹内両副会長を始め北海道、山梨、福岡支部からも参加会員があり、午前十時より式典、中村前副会長の基調講演、エーデルワイスクラブの歌声と、盛会裡に終了した。

●総務委員会・絹川
会員名簿は年末の刊行を目指して進行中だが、費用軽減のため広告を募集している。各理事の格段の協力をお願いしたい。

●山岳研究所運営委員会・坂本
①九八年度の管理人について。
②山研五月利用者は九十一名。(会員七割、非会員三割)

●図書・図書管理委員会・飯田
①「山岳史懇談会」『E・ヒラリー卿を囲んで』を八月二十七日に昭和女子大グリーンホールで開催。入場料千円。七月十日頃より事務局で販売。詳細は「山」七月号に掲載。②「山を語る」『ヒマラヤの東を語る』を十月二十四日に開催。詳細は「山」九月号に掲載。

③図書管理委員会では、ヒマラヤ、ヨーロッパの山岳・高原のガイドブック・地図の収集を目指している。現地購入誌など提供可能(有償取引)の会員はご一報を。

●科学委員会・森
連続講座「夏山気象入門」は北川、大井両講師のもと四回にわたり続け

られ、六月五日に終了した。落雷対策など、今までの常識とは違った実情が示され、興味深い講義だった。

●医療委員会・増山
六月六・八日、都庁会場(都民ホール、都民広場)で「第十七回日本登山医学シンポジウム」を開催。大森副会長の講演を始め、登山医学と安全登山に関するイベントなど、盛会裡に終了した。

●集委員会・勝山
五月二十四・二十五日、若葉会山行を秋田県和賀岳で開催。雨に降られ登山中止。参加者七十名。

●学生部・指導委員会・宮崎
①六月二十一・二十二日、小川山集会を開催予定。廻り目平周辺のクライミング。
②海外地域別研究講演会を開催。
・第一回「六月二十六日「ミャンマーの山々」講師「一橋大学山岳部OB・古瀬泰介氏
・第二回「七月十日「ブータンの山々」講師「千葉大学山岳部監督・吉永英明会員

●会員異動
物故
森谷虎彦(三五七〇) 9・3・6
村関利夫(四八九五) 9・6・6
退会
大久保孟(八〇九九) 9・6・30

衣笠加代子(一〇〇四三) 9・6・30	6月	総務委員会
鈴野五雄(一〇七〇四) 9・6・30	2日	自然保護委員会 アルパイン
江馬 諭(八二九七) 9・6・30	3日	スケッチクラブ
	4日	会報委員会 山の自然学
	5日	常務理事会
	6日	フォトビデオクラブ
	9日	アルパインスキークラブ
	10日	二火会 アルパインスケッチ
	11日	クラブ 95同期会
	12日	理事会 93同期会
	16日	科学委員会 集委員会
	17日	総務委員会 資料委員会
	18日	書委員会
	19日	フォトビデオ委員会 山げらの会
	23日	三水会 山研委員会
	24日	科学委員会 緑爽会
	26日	資料委員会 さん燦会 図書
	27日	管理委員会
	28日	自然保護委員会 青年部
	29日	学生部
	30日	青年部
	30日	山げらの会
	30日	資料委員会

6月来室者688名

ルーム日誌

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編

全10巻／新装復刊

日本登山大系

- ◆バリエーション・ルート・ガイドの集大成◆
- ◆利尻山から屋久島まで主要山岳の岩場・沢・冬期尾根ルート約4000を完全収録◆
- ◆豊富なルート図・概念図と詳細な解説◆
- ◆全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆◆

岩崎元郎著 ●1700円

沢登りの本(新装版)



白水社

〒101千代田区神田小川町3-24 ●03(3291)7811 ●定価税抜き

- ①北海道・東北の山 4700円
- ②南会津・越後の山 4700円
- ③谷川岳 4300円
- ④東京近郊の山 4200円
- ⑤剣岳・黒部・立山 4400円
- ⑥後立山・明星山・海谷・戸隠 4400円
- ⑦槍ヶ岳・穂高岳 4200円
- ⑧八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス 4400円
- ⑨南アルプス 4500円
- ⑩関西・中国・四国・九州の山 5200円

全巻内容

各A5判／平均320頁 (セット45,000円)

INFORMATION



◆ビールパーティーへのお誘い

集委員会・二火会 共催

恒例のビールパーティーを開催します。冷たいビールを飲みながら、夏山の思い出話を肴に、楽しい一宵をお過ごしください。

日時 九月六日 十七時

場所 日本山岳会集委員会

会費 二千五百円

◆一九九七年度自然保護全国集会

自然保護委員会

東海支部のご協力を得て、本年度

の全国集会を開催します。

日時 十月十八日(土)～十九日(日)

会場 三重県鈴鹿市 椿会館

内容

①各支部活動報告

②環太平洋一周環境調査登山隊報告

③登山者として取り組むべき自然保護

護

④十九日・入道ヶ岳登山

費用 一万円(保険料は別途)

申込 ハガキで千一五二 東京都目

黒区原町一―二―一七 金井一子宛

締切 九月二十日

◆秋のきのこ山行

集委員会

今年のきのこ山行はナメ沢を快適に歩く七ヶ岳。翌日はブナの原生林をたどり、高層湿原と特異な岩峰をたずねる三岩岳に決まりました。伊南川の深い溪谷の側に建つ今年オーブンの「花木の宿」では露天風呂も楽しめます。

日時 十月十八日(土)～十九日(日)

集合 十七日(金)二十三時三十分

新宿西口スバルビル前

宿泊 「花木の宿」

福島県南会津郡伊南村大字大

桃字平沢山一〇四一―

TEL・〇二四一―七六―三二一五

費用 一万二千元(宿泊費、懇親会

費を含む)

交通費 一万二千元(新宿より大型

バス利用・往復)

申込 ハガキに住所、氏名、会員番

号、バス利用の有無を明記の

上、日本山岳会集委員会宛

担当 中野 藤井 五十嵐

締切 九月十日 定員六十名

*申込者には詳細案内を送付します。

◆シンポジウム「山で役立つ天気の見方」予告

科学委員会

山で気象遭難しない、山をより楽

しむ、そのためには天気動向を判断し、好天を選ぶことも必要です。山の天気理解をより深めることを目的にシンポジウムを開きます。

日時 十一月二十九日(土) 十三時

十七時三十分

場所 明治大学駿河台校舎

J R 御茶の水駅下車三分

内容

①「山の気象と天気図の見方」

日本気象協会・奥山 巖氏

②「気象衛星雲画像の見方と利用法」

日本気象協会・黒田雄紀氏

③「気象に起因する山岳の危険な現象・谷川岳と富士山の事例から」

専修大学付属高校・小岩清水氏

④「北アルプスの雪・近年の変動から」

*詳細は「山」十月号に掲載します。

◆平成九年度東北ブロック集会

福島支部

恒例の東北ブロック集会を福島支

部の担当で開催します。今年は福島

支部創立五十周年に当たります。記

念事業の一環と位置づけして準備を

進めています。

日時 十月十一日(土)～十二日(日)

場所 二本松市温泉・国民年金保

養センター「阿多多羅」

TEL・〇二四三―二四―二三〇六

記念山行 安達太良山(一七〇〇メ

ートル 一／二五〇〇〇安達

太良山)

費用 一万五千元(一泊三食、懇親

会費を含む。昼食はお握り)

申込 住所、氏名、会員番号、所属

支部名、利用交通機関名を明

記したハガキ、または電話で、

福島市中町三十七 福島県国

保会館内 日本山岳会福島支

部事務局宛

TEL(昼)〇二四五―二三―二八一五

(夜)〇二四五―四六―三九七八

締切 九月五日(できるだけ早めに)

*申込者には詳細案内を送付します。

◆熊本支部設立四十周年記念集会と

記念登山 熊本支部

熊本支部では設立四十周年を迎え、

記念集会及び記念登山を企画しまし

た。多数の参加を期待しています。

なお、参加者には熊本支部設立四

十周年記念誌(熊本四十山ガイド)

を差し上げます。

日時 十月四日(土)～五日(日)

場所 熊本県阿蘇郡阿蘇町坊中

ビラパークホテル

内容

四日・十六時 受付

・十六時三十分 九州四支部合

同会議

・十七時 記念講演 斎藤惇生

会長

・十八時 懇親会

五日・八時 烏帽子岳(一三三七メ

◆年次晩餐会の パネル展示原稿募集

総務委員会

本年度年次晩餐会のパネル展示は委員会・同行会の発表にかえて「全国支部・とっておきの山」展を企画しています。左記の要領で原稿を募集しますので、ふるってご応募ください。

趣旨

登山道ガイドブックなどが氾濫していますが、まだ人知れず存在する「とっておきの山」があるのではないのでしょうか。すでにガイドブックなどで紹介されていても、ルートや季節によって新たな発見、感動が得られるコースが埋もれていると思います。これらを日本山岳会が優先して披露し、会員相互の理解と交流に役立てたいと考えます。

募集内容

各支部で推薦する山地・山名・コースとその推薦理由、その写真、紹介するコースの概念図など

締切

十月二十日(月)

詳細問合せ

担当総務委員・熊谷友昭

TEL/FAX・〇四二九一四八―四五三八

（トール）希望者は高岳も

費用 一万四千元（宿泊費 懇親会費を含む）

申込 千八六〇 熊本市二本木三―

三―八 田上敏行宛
TEL・〇九六―三二四―一二〇〇

千八六〇 熊本市清水本町一

〇―二〇 本田誠也宛
TEL・〇九六―三四三―四五〇〇

締切 九月十日

*申し込み受け付け次第、詳しい案内書、振り込み用紙を送付します。

◆第五回懇親山行及び懇親会

92同期会

日時 十月四日(土)―五日(日)

場所 富士山(須走口七合目太陽館に宿泊)兼・大貫会員の富士山登頂三百回記念祝賀会。

集合 十月四日十二時JR御殿場駅改札口(改札口は一か所)

費用 七千円(泊一食、交通費別)

装備 要・アイゼン、ピッケル

申込・問合せ 大貫金吾まで

TEL・〇四八―四七二―二三三九

*八月三十日十三時新橋東口新和ビル2F「バオス」(TEL・〇三―三

五七―六九五三)で夏の山行報告を兼ねた懇親会を開催します。申込不要、現地集合、持ち込み歓迎。

◆紅葉の秋山と里の歴史探求

95同期会

巻機山麓の宿「雲天」に泊まり、

当主小野塚氏と囲炉裏を囲みます。

清水集落の歴史や文化などを聞きながら交流できればと思います。翌日は紅葉の巻機山に登ります。95同期

以外の方もぜひご参加ください。

なお「雲天」は会報六二五号図書紹介欄で取り上げられました。

日時 十月四日(土)―五日(日)

場所 巻機山と「雲天」

費用 二万円(泊二食、交通費Ⅱ

都内発・往復バス利用)

申込 氏名、住所、年齢、会員番号

電話番号を明記の上ハガキで

千一五〇渋谷区神宮前三―二

九―一 奈良千佐子宛

締切 九月十五日 先着三十名まで

*申込者には詳細案内を送付します。

◆鈴鹿御在所岳登山

94同期会

秋の鈴鹿で紅葉狩りを楽しませ

んか。今回は東海地区の会員が案内役を務めます。

日時 十一月十六日(日)

場所 鈴鹿山系御在所岳周辺山域

日帰り山行(前日宿泊を希望

される方は御在所山の家・一泊二食二千九百円)

集合 近鉄湯ノ山駅 八時三十分

申込 千四四〇 愛知県豊橋市平川

本町二―一〇―一―二〇三

◆編集後記

七月二十六日のダウラガリの壮行会は予想以上の盛会で、胸をワクワクさせる波動が会場にみなぎっていました。坂下直枝会員の寄稿と併せて、JACのさらなる発展につながることを期待したいところです。

危険を回避し、困難を克服するために心身を研ぎ澄ませることは昔も今も変わるはずはありませんが、ソフト、ハードの両面で、山登りは明らかに進化の途上にあります。

頭とからだは純粹に喜ぶ山登りを実践するためには、染みついた古い既成概念や固定観念を一度洗い流すことも必要だと感じています。

若者には何よりも自由で解放的に創造性豊かな方向を模索してほしい。山登りの世界も、ひとつのうねり、規制緩和の潮流のなかにあるように思えてなりません。

祝、東海支部K2西壁初登!

(村井 葵)

日本山岳会会報 山 627号

1997年(平成9年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社